幸せの宣言

（ルカ 6 20-23）

5,1 さてイエスは[1]その大群衆を見るとあの山に登った。そして彼が座に着くと彼の許にその弟子たちが近づいた。2 そこで彼はその口を開いて、彼（女）らを教え始めて、曰く、

3 幸せだ、神に対して[2]極貧の人たちは。
なぜなら天の王国は、まさにその人たちのものだから。

4 幸せだ、悼(いた)んでいる人たちは。
なぜならその人たちこそ、慰められるだろう。

5 幸せだ、頭を垂れる人たち[3]は。
なぜならその人たちこそ、その地を受け継ぐだろう。

6 幸せだ、義[4]に飢え乾いている人たちは。
なぜならその人たちこそ、腹を満たされるだろう。

7 幸せだ、苦しみを共にする人たち[5]は。
なぜならその人たちこそ、苦しみを共にしてもらう[6]だろう。

8 幸せだ、心が清い人たちは。
なぜならその人たちこそ、神を見るだろう。

9 幸せだ、平和を行う人たちは。
なぜならその人たちこそ、神の子たちと呼ばれるだろう。

10 幸せだ、義[4]のために迫害されてしまっている人たちは。
なぜなら天の王国は、まさにその人たちのものだから。

11 幸せだ、あなた方は。もし人々があなた方を罵り、そして迫害し、そしてあなた方に対して私のために［嘘をついて］あらゆる悪口を言うならば。12 あなた方は喜び、そして歓喜しなさい。なぜならあなた方の報いは天において多い。というのは、このように人々はあなた方の前の預言者たちを迫害したのである。

---

[1] 直訳：彼は。
[2] 直訳：その霊において。
[3] 別訳：柔和な者たち。
[4] 詳訳：神と人に対する義しい関係。
[5] 別訳：憐れみ深い者たち。
[6] 別訳：憐れみを受ける。

形態／構造／背景

1-2 節は 5-7 章の山上の説教への導入部である。マタイはマコ 3, 13 から「山」のモティーフを、同 1, 21 から「教え始めた」というキーワードを取り出し、Q 文書の説教への導入部（並行ルカ 6, 20 前半）を書き直している。その結果ルカ 6, 17 によれば「平地」の説教であるものが、マタイでは「山上」の説教になっている。

3-11 節は「幸せだ」で始まる宣言が９つ並んでいる。９番目（11-12 節）は他より極端に長く、人称もそれまでの３人称から２人称に変わっており、明らかに拡大されたものである。平行箇所のルカ 6, 20-23(. 24-26) と比較すると、共通しているのはマタ 5, 3. 4. 6. 11-12 で、この部分はQ文書に遡る。5, 5. 7-10 はルカ版にはなく、Qがマタイに流れて行く途中（Q^{Mt}）ないし福音書記者の編集で付加された。6 節前半と 10 節前半はマタイが好む「義」のキーワードで対応し、3 節後半と 10 節後半の言葉が揃っていて（inclusio 囲い込み構造）、3〜10 節は 4 節ずつ二連の構成になっている（ルツ）。また「迫害」もマタイがよく使う言葉なので 10 節は編集句と考えられる。

אַשְׁרֵי/μακάριος で始まる「幸せの言葉」はヘブライ語聖書の知恵文学以来の様式で（詩 1, 1-2；箴 3, 13、他多数）、教育的・勧告的な文脈である振舞をする者を一般的に３人称で「幸せだ」と宣言するものであったが、これが黙示文学で苦境のただ中にある者に未来の幸せを約束する終末論的な言葉となった（ダニ 12, 12；エチ・エノク 58, 2-3[7]）。史的イエスの言葉はルカ 6, 20-21 に保存されている形に近く（マタイでは 5, 3. 6. 4 の順）、極貧の者、飢えている者、泣いている者たちに直接２人称で語りかけ、逆説的に幸せを宣言するところにその特徴がある。

注解

直前の段落で、復興されるべきイスラエルの地全体から集まって来て、イエスの後に従った「大群衆を見ると」（1 節）、彼は「あの山に登った」。「山」はマタイ福音書では特別な啓示と教えの場所（4, 8；8, 1；17, 1. 9；18, 12；24, 3；28, 16）であり、モーセがシナイ山で神から律法を授かり、イスラエルの民に伝

[7] エチ・エノク 58, 2-3 は例外的な２人称の典拠である。「幸せだ、あなた方義しい者たち、選ばれた者たちは。なぜならあなた方の運命は栄光に満ちたものとなるだろう。義しい者たちは太陽の光の中に、永遠の命の中にあるだろう。彼（女）らの命の日々には終わりがなく、聖なる者たちの日々は数えることが出来ない。」

えた故事を踏まえている（さらに 5, 14；14, 23；15, 29 参照）。「座に着く」という表現もユダヤ教で教師が教える際の姿勢である（23, 2「モーセの座に律法学者たちとパリサイ人たちは座っている」）。すると、イエスを大群衆が取り囲んでいる中で、「彼の許にその弟子たちが近づいた」。山上の説教の聴き手は、まず第一にはこの弟子たちであるが、さらにその外側を囲んで大群衆もイエスの言葉に耳を傾けているのである（7, 28-29 参照）。

3 節から始まる一連の言葉は、マタイの文脈ではイエスが神から派遣された「全権を持っている者として」（7, 29）行う宣言であり、彼が「幸せだ」と語ることで「天の王国」の出来事が起こり、語りかけられた者は事実、幸せになる（言語行為論のいわゆる「行為遂行的発話」）。これらの言葉はその意味で約束であると同時に（4-9 節の未来形）、事実の確認でもある（3、10 節の現在形）。

「極貧」（πτωχός）というのは、ただ「貧しい」というのと違って、今日食べるものもない、「乞食」をせざるを得ないような、極度の貧困を意味する。ギリシア語の語源は πτώσσειν「すくむ、身を屈める、卑屈になる」で、身を低くして物を乞う姿勢を表している。ヘブライ語で「貧しい」を意味する形容詞 עָנִי は「謙（へりくだ）っている」というニュアンスを持つ場合もあり（イザ 66, 2；ゼファ 3, 12；ゼカ 9, 9）、語源的には「身を屈める、お辞儀をする、頭を垂れる」を意味する עָנָו と近い（いずれも動詞 II עָנָה から）。ヘブライ語聖書には物質的に何も持っていない「貧しい」者が、同時に精神的に神に対して誇るべき何物をも持たない「謙（へりくだ）っている」者であり、その者たちこそ神に顧みられるはずだと信じる貧者の神学があった（詩 12, 6；22, 25-27；イザ 61, 1 さらに 57, 15 שְׁפַל־רוּחַ「霊の謙（へりくだ）っている者」他）。イエスはこの伝統の中に立ち、身を屈めて卑屈になることを強いられ、打ちひしがれていたガリラヤの最底辺の民衆に向かって、「幸せだ、あなた方極貧の人たちは」と宣言したのである。イエスの独自性は、この逆説の理由づけにある。彼は「なぜなら神の王国はあなた方のものだから」と言う。「あなた方のものとなるだろう」ではなく、現在事実として「あなた方のものだ」とイエスは言い切る。当時ユダヤ人たちの間で、「神の王国」＝「神が王として支配する事態」はやがて来るものと多くの者たちが期待していたが、現在それが出来事として起こっていると宣言したのはイエスだけである。マタイ版で「神に対して」（直訳：「その霊において」）という語が付加されたのは、「極貧」が貧者の神学の伝統において経済状況のみでなく、神との関係をも表しているということを明確にするためである（あるいは πνεῦμα＝רוּחַ を「霊」

ではなく「息」と取れば、「息も絶え絶えな者」「戦意を喪失しかかっている者」を意味するか？クムラン文書「戦いの書」1QM 14,7 עני רוח参照）。その結果、マタイ共同体に確実に存在していたであろう貧困層だけでなく、中間層以上の必ずしも貧しくない者たちにも、この言葉は訴えかけている。ただし、この付加によって元来の言葉が持っていた社会的な射程が失われ、個人の魂の内面だけを語る精神化が起こっている、とするのは誤解である。極貧であるがゆえに、卑屈になることを強いられ、打ちひしがれている者、自らのうちに何も頼みとするものがなく、神にすがるしかない者、神の王国はまさにそのような人たちのものだ、というのである。

4 節前半の「悼(いた)んでいる」はQ文書の一般的な「泣いている」（ルカ 6, 21b）という表現を具体的に言い直したものである。伝承の過程でイエスの「泣いている者」についての言葉が、おそらく聴衆をにらんで、死者を悼んでいる者に焦点を合わせるものに変更された。この節後半の「慰められる」もQの「笑う」を書き換えているが、4 節全体がイザ 61, 2b「すべての悼んでいる者たちを慰めるため」を参照していることは明らかである。「慰められるだろう」の受動態は、神の名を言わないための神的受動態（passivum divinum）で、隠されている動作の主体は神である。死者を悼んでいる人たちを本当に慰めてくださるのは神である。マタイ共同体の中核は、ユダヤ戦争を逃れて難民となり、パレスティナを出てシリアに流れ着いたQ文書の担い手たちであった。敗戦による亡国という民族の破局の中で死者を悼んでいる者たちが、一体どうしたら慰められるのか、それが問題であった。彼（女）らは、荒廃からの復興を語るイザヤ書の救済預言に、時代を越えて神の慰めの語りかけを聞いたのである。

「頭を垂れる人たち」（5 節）と訳した πραΰς はギリシア語では「柔らかい、優しい、柔和な」という意味だが、明らかに詩 37, 11（七十人訳 36, 11）の「〔神の前に〕頭を垂れる者は地を受け継ぐであろう」を踏まえており、上述のヘブライ語の עָנָו「身を屈める、お辞儀をする、頭を垂れる」を訳したものである。したがって עָנִי「貧しい」にも意味が近く、3 節の場合とは逆に、神に対する姿勢を表現しながら、同時に経済的に抑圧されて身を屈め、打ちひしがれている状態をも含んでいる可能性がある。そのような身を屈め、頭を垂れている人たちこそ、「地を受け継ぐだろう」と約束される。「地を受け継ぐ」というのは、ヘブライ語聖書以来、イスラエルに約束された嗣業の地を受け継ぐという意味だが、終末論的な救いに与るということと同義であり（詩 25, 13；37, 9. 11. 22.

29.34；イザ 57,13；60,21；65,9 他)、初期ユダヤ教黙示文学ではメシアの救いに入ることを意味し（エチ・エノク 5,6-7)、その範囲は宇宙大に拡大された（ヨベル 22,14；32,19)。ディダケー3,7 はマタ 5,5（あるいはその伝承素材であった特殊資料）を前提にして、幸せの宣言から倫理的勧告を作っている。「あなたは頭を垂れる人になりなさい。なぜなら頭を垂れる人たちは地を受け継ぐであろうから。」亡国の破局の中で故郷を去り、シリアで定住を始めたマタイのグループにとって、地は誰のものかという問いは切実なものだったに違いない。ユダヤ教では、父祖アブラハム以来、流浪の旅をしながら行った先で地を取得し、それを嗣業として代々受け継ぎ、神から約束され、与えられたものとする伝承を語り継いでいた（創 12,7；15,7.18-20；17,8 他)。古い土地の神学には、力強いイスラエルが先住民を駆逐して土地を取得するという発想もあったが（申 4,38；20,16；25,19；ヨシ 11,23 他随所)、他方で、力なく、打ちひしがれている人、頭を垂れている人たちこそ、「地を受け継ぐだろう」という終末の逆説的な待望も語られていた（上述の詩編、イザヤ書の箇所など)。客観的に見れば、マタイのグループは他所者であって、その地は先住のシリア人たちのものである。しかし、彼（女）らは、力づくでそれを奪うという土地の神学ではなく、終末論的な約束を選び取って語っていった。6 節の言葉は（他の幸せの言葉にも当てはまることだが)、イスラエルの伝統的な神学用語を用いながら、民族の枠を超えて、普遍主義的に解釈することが可能である。「地を受け継ぐ」のは、どの民族に属す者であろうと、自らの力を誇り、それに頼む者ではなく、「頭を垂れる人たち」なのである。

6 節前半はQ（/ルカ 6,21a）の「幸せだ、あなた方飢えている人たちは」を「義」と「乾く」という言葉で拡大している。「乾く」の付加はこの言葉が当てはまる者を拡げて一般化している。福音書記者マタイにとって重要な概念である「義」((ヘ) צדקה／צדק（ギ）δικαιοσύνη）は、「共同体／交わりに対する忠誠／信義」を表し、神と契約を結んだ民の共同体の生活をあるべき形で行っていくための、いわばガイドラインとしての律法を遵守することをも表現する（3,15 への注解を参照)。そしてさらに、神が与える救いの意味にもなる（イザ 45,8；62,1-2；詩 40,10-11；85,11-14;ダニ 9,24 他)。ここでは「飢え」そして「乾く」という動詞の目的語にこの「義」が付加されることで、元来の身体的困窮状況についての言葉が、神との契約共同体の視点で再解釈されている。その結果、3 節と同じように、貧者の神学が持っている社会経済的な側面と神に対

する関係の、切り離せない二つの視点がより明確となり、必ずしも貧しくない者たちにも語りかけるものとなっている。この「義」は伝統的に、カトリックでは人間が能動的に行う徳、プロテスタントでは神から受動的に受け取る救い、を意味するものと解釈されてきた。しかし、「義」は神と人、人と人の間の関係を表す概念であるから、二者択一で考えるべきものではない。神から与えられる正しい関係を渇望する者は、自ら神の意志に添って行動するはずである（詩 40,9）。6,33 では「まず神の王国とその義を求める」ことが命じられ、「そうすればこれら〔衣食の〕一切はあなた方に加えて与えられるであろう」と約束されている。そこでも身体的困窮状況と契約共同体の信義は密接不可分である。

「苦しみを共にする」（7 節前半）と訳した形容詞 ἐλεήμων は、「苦しみを共にしてもらう」（同後半）と訳した動詞 ἐλεεῖν と同根で、ἔλεος「憐れみ」が語源であり、普通は「憐れみ深い」「憐れみを受ける」と訳されている。ギリシア語の ἔλεος は、苦境に陥っている他者に直面して引き起こされる（自分にもその災悪が降り掛かるかもしれないという恐怖を伴う）強い感情を表し、自由人に相応しいものと言われたが、感情に左右されない理性を重んじるストア哲学では、心をかき乱されるため、賢者に相応しくないものと判断されていた。ヘブライ語聖書と初期ユダヤ教において、これらのギリシア語の背景にあるヘブライ語の概念は חֶסֶד である。חֶסֶד は聖書において非常に重要で積極的な概念であり、親密な関係にある者同士の信頼に基づく行為を表す。これは文脈によって「誠実、忠実、慈愛、恩恵、憐れみ、赦し」を意味することができる。マタイは ἔλεος/ἐλεεῖν「憐れみ／憐れむ」という言葉を編集句でよく使う。徴税人たちとの食事（マタ 9,13）と麦穂摘みの場面（12,7）で、マルコにはないホセ 6,6 の引用「私の望むのは憐れみであって、犠牲ではない」を挿入しているし、治癒奇跡物語で、マコ 10,47 にあった「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください」という嘆願の言葉をなぞりながら（9,27; 20,30-31）、他の箇所にも同様の言葉を挿入している（15,22; 17,15）。さらにQ文書の「律法の最も重要なもの」にも「裁き」と「信頼」に並んで「憐れみ」を加え（23,23）、特殊資料の「悪い僕の譬」では「私もお前を憐れんだように、お前もまたお前の仲間である僕を憐れむべきだったのではないか」と書いている。これらの箇所で「憐れみ」の対象となるのは、社会的差別、空腹、病、借金によって苦難を負っている者である。そのような苦難を負っている者の苦しみに共感し、その苦難を共に負い、苦痛を和らげるために行動を起こすこと、それこそが神の望まれる

「憐れみ」だというのである。「憐れみ」という日本語からは、情緒的に上から下を見下す憐憫の感情が連想されがちであるが、他者の苦痛を共に担う具体的な行動が意図されているので、「苦しみを共にする」と訳す。「苦しみを共にしてもらうだろう」（7 節後半）の受動態は、これもまた神的受動態で、終わりの時に神が חֶסֶד「誠実、慈愛、憐れみ、赦し」を示して下さるという約束である。その神は、上から下を見下して憐れみの感情を抱く神ではなく、苦しみを共にし、具体的な行動を起こして下さる神である。この意味では、箴言 17,5 で七十人訳が付加しているヘブライ語聖書本文にない一文が、マタ 5,7 に近い。「〔他者に向かって〕断腸の想いに駆られる者は苦しみを共にしてもらうだろう。」

8 節では「心が清い人たち」は「神を見るだろう」と約束されている。ヘブライ語聖書で「清さ」は、神の聖なる領域と神に反する不浄な領域の間に挟まれた中間領域の特徴である。神の領域に属すのは、たとえば神殿、安息日、祭司、祭儀の執行など、中間領域に属すのは、イスラエルの民、平日、家と土地、正しい行為など、神に反する領域に属すのは、外国、呪いの日、無割礼の者や死者、そして冒涜行為である。聖なる世界は清さを強め、神に反する不浄な世界は押し迫って来て、清さを損なおうとするが、聖なる世界は不浄さを押し返す（図「ヘブライ語聖書における『聖』『清浄』『不浄』」を参照）。祭司が執行する祭儀は清浄性を維持強化するものと考えられていたが、預言者たちは形骸化した祭儀を厳しく批判し、倫理的な行為における清さと社会的正義の実践を要求した（イザ 1,10-17；エレ 7,21-23；アモ 5,21-24；ミカ 6,6-8 参照）。イエスはこの預言者的な伝統を引き継ぎ、人間の内と外の全体が清くなることを求め（マタ 23,25-28/ルカ 11,39-41.44）、さらに次のように喝破した。「すべて外から人間の中に入って来るものが人間を不浄にすることはあり得ない…というのは、それは彼の心の中ではなく、腹の中に入って行き、そして便所の中へ出て行くからだ」（マコ 7,18-19/マタ 15,17）。神殿入場の典礼の一部とされる詩編 24,4 では、「心が清い」者が「神の顔を尋ねる」者であるといい、11,7 では「直き者たちこそその顔を見るだろう」と約束されている。さらに 27,4；42,3；63,3 では「主の家」「神の家」「聖所」すなわち神殿で神の顔を見る切なる願いが語られている。神の顔を見ると死ぬという思想（出 19,21；33,20；士 6,22；13,22；イザ 6,5 等）とこれは一見反するが、神殿での祭儀における神の現臨に接することを表現している。これがマタイ 5,8 の幸せの宣言では終末に待望される約束、究極的な救いの意味になっている（Ⅰコリ 13,12；Ⅰヨハ 3,2；ヘブ 12,14；

黙 22,4 参照)。5,23-24 を見ると、福音書記者マタイが批判しているのは祭儀そのものではなく、人間の内面と外面が分裂し、他者との共同性を排した個人的な神関係を追求する形骸化した祭儀である。神は人間全体が清くなることを求めている。私たちの礼拝、私たちの捧げ物は神の喜ばれるものになっているだろうか。外面だけを取り繕って、内面は神の意志に反してはいないだろうか。個人的な救いのみを求めて、社会的な正義の実現をなおざりにしていないだろうか。この一節が現代日本を生きる私たちに投げ掛けている問いは非常に深刻である。

9 節は「平和」がテーマである。聖書における「平和」(שָׁלוֹם／εἰρήνη) は単に戦争がない状態を表すのではなく、欠けがなく、どこも損なわれておらず完全で、無病息災、平穏無事な状態ないし関係を表す包括的な概念であり、文脈によって民の安寧、弱者の保護を含む社会的秩序、個人の健康、幸福、また人間と被造世界の関係をも表すことができる。「平和が〜に／〜の上に」というのは挨拶となった言葉だが (マタ 10,12-13 参照)、究極的にその平和の言葉を語り、出来事とするのは神である (詩 85,9)。しかし人間にも神の平和に即応する社会的行動、「共同体／交わりに対する忠誠」としての「義」(上述 6 節への注解参照) が求められる。この行動が平和を創るのであり (イザ 32,17)、人は「平和を探してこれを追え」と命じられる (詩 34,15)。εἰρηνοποιός という言葉は七十人訳と新約聖書 (すなわちギリシア語聖書全体) でここマタイ福音書 5,9 にしか出て来ない。これは「平和主義者」「平和愛好者」という心情的な意味ではなく、文字通り「平和を行う」という具体的な行動を起こす者を表す。マタイの文脈ではこの言葉は直後の 10-12 節、また 44-45 節と密接に関連しており、彼の共同体にとって「迫害する者たち」との敵対関係の中で、いかにして平和を実践していくかが大きな関心事であったことが伺える。ユダヤ戦争を体験したマタイの共同体は、平和の尊さを骨身に沁みて知っていた。福音書記者はイエスのエルサレム入城場面で、イザ 62,11; ゼカ 9,9 の引用を挿入し、軍馬ではなくロバに乗るイエスが平和のメシアであることを強調し (マタ 21,5)、捕縛場面では特殊資料から剣の言葉を採用して、読者に徹底した非暴力の実践を促している (26,52)。マタイの共同体にとっては愛と和解の福音を説き、実践していくことが、「平和を行う」唯一の可能性であったからである。「神の子たちと呼ばれるだろう」というのもまた神的受動態である。神が終わりの時に、「私の子」と呼んで下さるという約束である。平和のメシアであるイエスが神に「私

の子」と呼ばれたように（3,17）、そのイエスに倣って平和を実践する弟子たちも「神の子たち」と呼ばれる希望を持っている。ローマではカエサル（紀元前１世紀半ば）が（暗殺される時に丸腰であったために）「平和を行う者」と呼ばれ、コンモドゥス（紀元後２世紀末）が「世界を平和にする者」と呼ばれている（ディオ・カッシウス『ローマ史』44,49,2；72,15,5）。マタイ福音書で「平和を行う者たち」と呼ばれているのは強大な軍事力を誇った世界支配者、皇帝ではなく、剣を取らず戦争難民となったローマ帝国辺境の小さなグループである。この群れが「神の子たち」と呼ばれる希望を抱いて、敵を愛し、迫害する者のために祈り（マタ 5,44-45）、真の平和を実践しようとしていたのである。その意味でこの 5,9 の言葉は、「ローマの平和」に抗って神の平和に即して行動する者たちの非暴力抵抗宣言と見ることが出来る。現代の私たちは、平和のためにどのような具体的行動を起こすことができるだろうか。

10 節はＱ文書（マタ 5,3.4.6.11-12）からマタイに流れて行く中で拡大されたもの（5 節、7-9 節）に、最後に福音書記者によって付け足された編集句と思われる。この言葉が語られた時、伝承を担っていた共同体は明らかに迫害を受けてしまっており、追いつめられた状況に陥っていた（完了分詞 δεδιωγμένοι は、迫害を受けたその結果が現在続いていることを表す）。マタイは 11-12 節でさらに迫害についてＱ文書の言葉を継いで展開しているが、彼がこの伝承を受け取って編集した時点でも、その迫害状況は継続し、深刻化していたことが推測される。マタイの共同体から派遣された「預言者と賢者と律法学者」の一部は迫害されて「町から町へと」逃げ回っているのである（10,23；23,34）。迫害の原因は「義のため」である（6 節への注解参照）。神から与えられる正しい関係を渇望し、それゆえ神の意志に添って行動する者は、神に敵対する者から迫害されるが、神は必ずその忠誠に応えて救って下さるというのが、ヘブライ語聖書以来の「苦難の義人」の思想である（詩 22；31；34；37；69；140；ソロ知恵 2,10-20；5,1-5；エチ・エノク 95,7；96,8 他参照）。5,44 では「あなた方の敵を愛し、あなた方を迫害する者のために祈れ」と一見不可能であると思われることが命じられるのであるが、それが可能となるのは、神が必ず救って下さるからであり、「天の王国は、まさにその人たちのものだ」という約束があるからである。

上述のように 11-12 節はＱ文書の中で拡大された部分であり、ここまでの３人称とは異なり２人称複数の「あなた方」に対する直接の語りかけで、マタイ

の文脈では直前の10節の「迫害」のテーマを詳しく展開するものとなっている。マタイはここでQ（/ルカ 6,22-23）にあった「締め出す」（ἀφορίζειν）と「する」（ποιεῖν）をどちらも「迫害する」（διώκειν）に変えて用語を統一している。また「あなた方の名前を邪悪なものとして外に出す」（ルカ 6,22、ギリシア語としては不自然なセム語法（申 22,14.19 参照））を「あなた方に対して［嘘をついて］あらゆる悪口を言う」に変えた結果、Qから読み取れるユダヤ教会堂からの追放（「締め出す」「外に出す」）が明言されていないことになる。これはマタイの共同体が多数とは異なる意見を持つ少数者として迫害を受けながら、なおぎりぎりのところでユダヤ教の枠内に留まっており、少なくとも自分たちの側からは交わりを断とうとはしていないことを示唆する。11 節の「もし」以下は漸増的に迫害状況の先鋭化を語っている。初めは「罵る」（言葉の暴力）、次に「迫害する」（会堂でのむち打ちなど実力行使による暴力）、最後は「私のために［嘘をついて］あらゆる悪口を言う」（ローマの官憲に引き渡され、イエスに対する証言を求められる裁判［での偽証］、10,17-18 参照）となっている。イエスもまた、罵られ（27,44）、鞭打たれ（27,26）、偽証された（26,59-60）。イエスの後に従う弟子は、彼と苦難を共にするのである。マタイはQの「人の子のために」を「私のために」に変えて、弟子たちが受ける苦難はイエスを告白するためであることを明確化している。

12 節ではこの迫害されている者たちに「喜び」と「歓喜」が命じられ、その理由として天における報いが約束されている。これは「義人の報い」（10,41）であり、人の子が再臨の時に与える「各人の行いに応じた報い」（16,27）である（箴言2,7；トビト4,5-11.14；ソロ詩9,9；Ⅳエズラ7,77；マタ6,20参照）。ただし、この報いは神と取引して受け取るものではなく、恵みとして与えられるものである（マタ 20,1-16）。預言者たちが迫害を受けることはヘブライ語聖書以来の伝統的な思想である（ネヘ 9,26；王上 18,4.13；19,10.14；代下24,20-21；36,15-21；エレ2,30；26,20-24）。マタイはこの預言者迫害の伝統を引き継いでいる（21,34-39；22,6；23,29-31.34-35.37）。「あなた方の前の預言者たち」には、ヘブライ語聖書の預言者たちに始まって、浸礼者ヨハネ、イエス、そしてイエスの弟子たちが含まれている。主に遣わされ、義の道を歩むゆえに迫害される者の伝統が、ここでは意識され、読者はこの伝統に参与するように促されるのである。